

ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究 (10)

—日本の高校生の英語学習観を探る

(ソシユールの言語観を礎として) —

末 延 岑 生

はじめに

戦後いち早く厚生省は、若者を身体面で西洋人並みの体格に追いつくことを目指し、西欧に引けを取らない若者を作り上げた。文部（科学）省も知識面で、英米英語を真似させて英語能力の達成を目指し、中学、高校で6年間、それに大学の4年間を加えると10年、毎年3,500万の若者達に英米、中でもアメリカのいわゆるネイティブ英語・文化をもそっくりそのまま植え付けようと苦心してきた。しかしその甲斐もなく、使える人はほとんど見かけない。これほどの徒労を費やしながらかこの国は、いつの間にか英語の文法と発音が教養のシンボルとなっただけではなく、社会的地位獲得のための重要な道具とする風潮を加速してきた。

そして今もなお学校の英語授業では、「正しい英語」つまり実質的には身体でいえば表相的な各部位に相当する、英米英語にせまる発音と文法模倣の育成が幅をきかしている。その意味で観点を変えれば、日本の英語教育は日本古来の知恵をもって、自然に生まれ育ってきた日本人特有の知恵から生まれた「ニホン英語」、身体でいえば「内臓」を、異なった言語観のもとに文部（科学）省が中心となって、英米文化に偏向した数々のテスト・試験を試すことで逐一授業から追放し、撲滅しようとしてきた歴史を持つと考えていいのではないか（末延 2016 pp.25-31ほか）。身体の表面がどんなに恰好よく鍛えられても、形や相がどうであれ「内臓」が機能していなければ人は生きられない。

本稿ではそれが日本の生徒・学生たちにどんな影響を与えてきたかをアンケートを通じて明らかにすると共に、彼らが受けてきた多くの貴重な経験とその結果をここに再確認する中に、本来の然るべき英語教育の道を探った。

1. アンケートについて

筆者は大学での授業の傍ら、この30年にわたって『ニホン英語は世界に通じる』あるいは『君の英語は世界に通じる』と題して、関西を中心に講演を行ってきた。アンケート実施の方法は、こちらが問いたい既成の質問項目だけを、ただチェックさせるような形式のアンケートは一切用いず、各生徒に筆者の講演について心から感じた事、思ったことを何でも自由に、自然な形で感想文として気楽に書いてもらうことに徹した。それは生徒たちの受身の形でなく、多様で積極的な、個性ある生の声を聞きたかったからである。それが形式的な Q-A 形式のアンケートよりも、個々人の多様な意見や要望などの特殊性を探ることに重点を置いた理由である。

そのため結果として具体的な数値が出るわけでないが、これが対象者たちの生の声を直接聞くには最良の方法だと考えた。中でも代表的な各感想文に加えて、どんな“ダイヤ”が発掘できるか。それにより思いがけない考え方、希少価値の、こちらが考えもしなかった、はっとする意見に出くわすことができたことは幸運だった。中でも思いがけなく、後述する近代の大言語学者 F. de ソシュールの言語の観点と学習者の観点との一致点がしばしば見出され、生徒たちの中には、学習の最初から自分たちなりのとはいえ、言語原理に沿った学習を切望している人々が少なからずいたことが分かった。

実施時期等

実施時期は1985年頃から2018年までの約30数年にわたる。対象者数は約1万名程度で、その内訳は高校をはじめ、中学、大学の生徒・学生たち、それにたとえば福祉関係や消防などの施設やサークルに携わる社会人等であった。

演題は『ニホン英語は世界で通じる』あるいは『君の英語は世界で通じる』であった。講演は1時間から1時間30分で、解説はパワー・ポイントによりプロジェクターを使用した。ニホン英語については末延 2017 (pp.111-113) でも解説したが、本稿の最後に補足としてスライドを一部掲載した。以上、ソシュールの観点からアンケートの内容をまとめたのが本稿である^{注1)}。次の章では言語学・言語教育の立場からアンケートを整理するに際して、その土台となったソシュールの言語観、つまりことばとは何か、それをどのように観るかについて述べる。

2. ソシュールの言語観

人は生まれた環境・地域の身近なことばを、好き嫌いに関係なく当然のこととして学び、それを自分の所有物としている。こうして人はほぼ例外なく、生まれついた時から自

分の身の周りの言語を学ぶことができるように仕込まれている。しかしこの国では小学校の高学年にもなると、いきなりアメリカの方言英語を標準英語として、これも否応なく学ばされる。自分には直接関係のない、知らない人たちがばかりのアメリカ人の日常使っている言語のみならず、彼ら独自の文化までを真似て学ぶことになる。

アメリカの文化にどっぷり染まったアメリカ英語を学ばされ、生を受けて10年以上も馴染んできた日本語の発音や文法がひょっこり顔を出すたびに、待っていましたとばかりに“あなたの「ニホン英語」は通じない、アメリカ英語でなければ通じない”などと揶揄され罰点されるような、不自然な教育がなされているのが現状である。

では英語という大河の下流を見てみよう。現在世界の約20億人近くが、それぞれの環境・文化と母語に根ざした多様な異種の英語を使う。そのうち、英米を除いた16億人は、ニホン英語のような、一つ一つの単語を区切って、ゆっくりした、わかりやすい変種の英語方言を使う。その種類は確認されているだけでも優に64種を超える (本名1992 pp.1-22, 末延 2014 p.128)。そのどれもが言語学的にまったく自然な現象の結果である。日本で以上のような不自然な英語教育がなされてきたのは、英語をなぜどのように教え、学ぶかの理解つまり文科省・教授側と学習者側が互いにできていないからである。本稿では、その点を原点にもどって考えて行くことにする。

(1) ソシュールの言語観について

F. de ソシュールは近代言語学の祖といわれ、20世紀を代表する言語学者でもある (末延 2017 p.75)。現代の言語学、言語教育学の基礎は彼の打ち立てた次のような言語観をもとに構成され、世界ではすでに言語学・言語教育学の誰もが知る常識として実際に運用されている (末延 2017)。

A. 言語観

ソシュールの言語観、その観点についての記述は、末延の 2017 pp.93-123に詳しく論じたので、ここでは簡単に述べる。「言語 (学) の十全で同時に具体的な対象は何か。」という問いに対するソシュールの答えは、「観点が対象をつくり出す」という (ソシュール 小林訳 1980)。では観点とは何か。本論文においてこれが最も重要な論点となるので詳しく論ずることにする。

一般に観点とは、簡単に言えば「ある人に見えた、あるいはある人が見たその通りの見方」といえよう。広辞苑によると、観点とは「観察・考察するときの立場や目の付けどころ。見方、見地。」と書かれている。正方形の窓は上下左右から斜めに見ると、遠近の関係で台形に見える。しかし頭に残るのは概念としての全辺の長さが等しい正方形である。つまり視覚は実体と異なりながら、正方形として知覚される。また何かにさえぎられて一

部が見えなくても、推理して正方形として見ることができる。ところが色眼鏡や歪んだレンズを通して見た場合、その物体の色は実体とは異なり、メガネの色や歪みに影響されて見える。

さて、掘り出された大きな大理石の原石の前に、彫刻家は芸術家としての確固たる信念と観点をもって何かを想像し、まだ見えぬ物体を頭に描きながらノミを入れ創造、制作にかかる。しかし言語を扱うすべての人々、なかでも毎日その研究・教育に取り組む者にとっては、彫刻家の前には原石という実体としての対象が存在するものの、彼らにとって言語は、原石に当たる実体さえもない。その事実をソシユールは言語の具体的な対象を「観点に先立って対象があるのではなく、観点が対象をつくり出す」と表現する。「観る」とは人間にとってただ一つの我がものである「心」が観ずるものである。それをことばのありうべき姿をそのまま心通りに観るか、それとも自己の心のままに思い通りに観るか。ことばを利他的に観るか、利己的に観るかが問題となる。

B. 言語の本質

言語というものの本質を明らかにするために、ソシユールはアメリカの生物学者ホイットニーから言語について、言語そのものが発達する有機体ではなく、ことば集団の集団精神の所産であることを学んだといわれる (ソシユール 影浦・田中訳 2007 pp.18-34)。つまり、ことばは社会集団に暮らす人間の助け合いのための社会的道具であり、世の中が平和に行くために仲良く楽しく暮らすために、互いに相手のことを考える他己的観点の世界で使われる。そのために言葉が存在するという見方である。つまり言語の対象はいわゆる「話せばわかる」に対する「問答無用」といった利己的観点の世界とは逆の世界と言えないか。

C. 言語能力と言語運用

ソシユールは、①人間のもつ普遍的な言語能力をランゲージ (*langage*) と呼び、さらにこれを社会制度としてのラング (*langue*) と、個人が現実に行う発話行為としてのパロール (*parole*) に分類した (ソシユール 2007 pp.4~)。コミュニケーションが成立するためには、まずパロールが先行するが、その前提となるのがラングであり、パロールはそれに規制される。つまり書く前に話すこと、文字の前に音があるように、言語は生きたものであること (田中 p.31) つまり言語は実体ではなく、話し手にのみ存在する (田中 p.51) ことを明らかにした。②言語の動態面の研究を「通時言語学」、静態面の研究を「共時言語学」とよび、この二つの方法論上の混同を戒めた (ソシユール 2007 pp.135~, pp.142~)。

D. 言語にまつわる偏見の一掃

ソシユールは、言語学上世俗で無益な迷信や偏見を一掃するため、たとえば文法学を見

直し、プラトンや聖書の伝統的言語観である言語命名論や言語衣装観を否定、言語以前にはそれが指し示すべき識別可能な事物も観念も存在しないことを明らかにした (田中 p.24)。

以上のようなソシユールの言語に関する発見のうちのいくつかの断片が、本稿の高校生の感想文の中にも垣間見られることが分かった。それらをも含めて次章で検討する。

3. 日本の高校生の英語 (学習) 観

筆者は言語学・言語教育の観点から、根拠のない現在のネイティブ英語一辺倒の傾向にある日本の英語教育の現状を、ソシユールの言語学と教育学の理念に基づいて是正することは非常に困難であると考え、それよりも実際にそれを学ばされている側の人々を相手に、筆者が提唱してきた「ニホン英語 (末延 2016 pp.110-114)」についての意見を直接聞いてもらうのが最適だと考え始めた。そこでこの30年にわたって、国内はもとより海外の学会等を通じて世界で「ニホン英語」に関する講演を約100回近くにわたって行ってきた。

本稿では、筆者の講演をもとにして、日本の英語学習者たち、なかでも高校生の多くが真に求めている英語教育のあり方を、率直に聞き出そうとする試みを行った結果を発表することを目的とした。その結果、彼らが肩を張らないごく自然な形で素朴な英語学習を、どれほど真剣にかつ強く求めているかを知ることとなった。今回は主に高校生 (一部大学生を含む) のアンケート結果に焦点を当てた。まず最初に、毎回約1時間から1時間半に及ぶ講演全般に対する、高校生たちからの大まかな感想を示す。「こんな考えもあるんだ」、「考えが変わった」と次のように証言している。

「講演会を聞いて今まで考えていた全く逆の視点が生まれました。高校1年 K.T. さん (以下高1 KT と略す。下線は筆者による。)」

「今までとは違う考え方があるということが知れてとても嬉しかったです。今まではどれだけアメリカやイギリスの英語のアクセントやイントネーションに近づけるようにするのが一番だと思っていましたが、今日の講演ではニホン英語が一番伝わりやすいと言われていたのを聞いて、無理に近づけようとしなくていいんだ、と思いました。(高1 YM)」

「日本の英語で良いというのは新しい見方でびっくりした。大学ではこういう研究をするのかとちょっと知れてよかったと思う。(高2 GT)」

「考えが大きく変わったと思います。英米人の英語は聞き取りにくいです。日本人の英語でも十分に相手に伝わることを知って少し英語の勉強が楽になると思います。(高2 SK)」

「英語の違った見方、考え方があったことが分かりました。単語をしっかりおぼえることが条件だと思いました。(高1 YS)」

「世界の約20億近くが固有の英語を話している…こんな考え方があったんだ。(高1 HK)」

「ニホン英語は大きな声で離れている人にも伝えやすく、英語圏外の他国にも伝わりやすい(筆者注末延 2012) ことも初めて知りました。逆に英国や米国の英語は伝わりにくいことも驚きました。視野が広がりました。(高2 TA)」

「衝撃を受けた。英語の考え方で初めてという考え方もあるんだなと思いました。伝わればいいじゃないか、自分が思っていたことを今になって言われ驚きました。またビデオで様々な国の人がネイティブな英語と言われるアメリカ英語ではなく、自分の国の英語に自信を持っていることにも驚いた。深く心に残る講演会でした。(高2 YS)」

以上のように筆者の講演後の感想として、彼らの多くが筆者の提唱するニホン英語に対して「今までと逆の考え方」、「初めての考え」、「新しい見方」「衝撃を受けた」という感想が多数みられた。これは事前に予想していたことではあるが、これほどの反応までは予期できなかった。では彼らが講演以前の段階で、自分自身が英語学習に対してどんな観点を持って、あるいは教師からどんな観点を指示されながら接してきたのだろうかをその文面から見ることにする。

(1) 7つの「負の動機づけ」

日本の英語教育の世界では、生徒たちが「はじめて」「新しい」「衝撃を受けた」といった、上に見られるような感想文は何を意味しているのだろうか。言語学的にも、心理学的・教育学的にも改善されることなく、以下に述べる強烈な「負の動機づけ」がなされてきたことを物語っているのではないだろうか。この百年、ただ戦時中のみ敵のことばとして英語を忌み嫌わせ、禁止してきたという歴史があるが、それ以外、現状では少なくとも教室現場では文部(科)省がまるでリバウンドするかの如くに、いわゆる英米のネイティブ英語を再び羨望的として、究極の目標言語として推し進め、現在に至っている。それは生徒たちの次のような文面から読み取ることができる。

A. ネイティブ英語の模倣の強要

古くは文部省、現文科省の学習指導要領に沿って、英語科教育は暗に英米のネイティブ英語を模倣しなければ正解とは認めないという縛りが教師間に見えるが、その前に数々のバイアスや言語差別を踏み越えて、「なぜアメリカ英語か」を考える必要がある。これについては拙稿を参考してほしい(末延 2016 pp.24-25)。

「今までできるだけネイティブの英語にするようにといわれてきたが、ことばの目的である“言葉伝える”という点では日本語の英語も、英語の発音としては間違いであるかもしれないが、活用できることがあると思う。(高1 KJ)」

「今まで全く持ったことのない考え方・意見をたくさん知ることができました。英語はとても難

しくて、ネイティブ英語だけが正しいと思ってきました。講演で先生の見解は、こんな考えがあるのかとびっくりでした。また、それに納得してしまう自分にもびっくりしてしまいました。(高1 KJ)」

「今まで英語の発音は本場の英語のようにやるものだと思っていたが、ニホン英語でも十分相手にわかりやすく伝えることができ、またニホン英語では日本人であることの証明にもなるということが判り面白かった。英語での興味が関心が少し高まってよかった。これからもニホン英語の良さを広げていけるように頑張ってください。(高2 KT)」

「日本人は本場のようななめらかな英語を話せるようにしたいと思うのは、今思うと結構疑問に思います。共通語として話されている英語ですが、きちんと自分の伝えたいことが相手に伝わるのが大切であり、たとえそれがどんなにぎこちなかったりカッコ悪くても、その目的さえ達成していれば大丈夫であると感じました。新しい視点から英語というものを見ることができるようになりました。もっと多くの人が伝わる英語を話せる事に誇りを持ってほしいと思いました。(高2 KD)」

「今までに聞いたことがなかったような自論を聞かせてくれる講演会でした。英語は読み方を省略する方がカッコいいって中学校では言われていたから、先生の独自の考え方がすごい面白かったです。僕にはそこまで考えられる余裕がないからうらやましいです。英語ひとつとってもいろんな見方があったので、いろいろなことを考えてみるのも面白いのかなと感じました。(高1 IS)」

ここで垣間見ることができる教授者の観点の一部は、英語が伝わることと同様、できればカッコよければいいという、ことばの表層思想構造が見られることがわかる。ほんの軽い表現かもしれないが、成績に通ずる生徒の立場からすれば、単刀直入に言うなら言語の本質、学習者の意欲を軽視した姿が読み取れる。生徒の感想文の局所に見える「…と思いました。」は正確には「思わされてきた。」が現実であろう。なぜなら多くの英語試験という名でのニホン英語では通常正解として受け付けられないのが現状だからである。

「ニホン英語とても興味深い話でした。今学校で自分は少しでもアメリカ英語に近い英語ができるように、や、正しい文法を身につけられるようにと必死になっています。しかし学校にいる外国人の先生と会話をする機会がある時、文法等を気にしすぎて話をスムーズにすることができません。今回の講演を聞いてそういう事を気にしてはいけない！と思いました。大切なのは積極的に話しかける事なんだと思いました。(高2 IR)」

「英語というものは正しい文法の中で話さないといけないと思っていました。しかし、意味さえ伝われば多少違ってても問題はないという考え方に驚きました。確かに日本人全てがアメリカに行ってその人々と完璧にあらわせるわけがないですね。それでも日本の野球選手はこれといって英会話を習っていると思えないのに普通に生活しているところを見ると英文法が完璧でなくても英会話は成り立つという事になるんですね。(高2 HT)」

「日本人は英語の発音が苦手だと聞いたことがある。だから、余計にネイティブ英語にこだわるのではないだろうか。“外国人にバカにされたくない”という意識が強いからこそ、ネイティブの

ように話そう、となってくる。私たちは自分の国に誇りを持たずにネイティブのように話すことしか考えていないから、馬鹿にされる…。(大学1 KM)

「私は今までは自分の話す英語が嫌いで嫌いで仕方がなかったです。なぜなら、学校の先生が発音をうるさく指摘するからです。私自身、話せればいいじゃないかと反発していたから、人前で話すことが苦手でした。でも、一番初めの講義で先生の話聞いて、「アジア英語」という言葉を初めて聞きました。このアジア英語、これから先、私はこの言葉を忘れません。なぜなら、このアジア英語という言葉が、今まで不思議だったことの結論を出してくれたからです。日本人として、アジア人として、堂々と自信を持って英語が話せそうです。(大学 FI)」

生徒たちは教室現場で英語についてどのように教えられてきたか。「社会言語能力とは敬語のように社会によっては必要なものができるかどうかの力を言う (白井 2008 p.86)」ように、アメリカ文化の中のこの能力をつけさせるためにアメリカ英語の発音も文法もアメリカ社会・文化に右習えすることを余儀なくさせる。日本人指導者は英語学習においてもアメリカの社会だけが使うような難解なイディオムを大学入試にも続々と取り入れ始め、強調しすぎる傾向がある。その結果、英語ができるといわれる日本人の多くは、言語の多様性を認めない国籍不明型人間に陥りやすいだけでなく、それを他民族にも押しつけるといふ、それこそ間違った民族差別思想を生んでいることになる。

たとえば日本人の一部の若者や若い政治家の、東南アジアでの思い上がった振る舞いは、彼ら現地人の英語を軽蔑し、まるで英米のネイティブ気取りで得意げに訂正してやる姿だ。世界中で自分の生まれ育った郷土のなまり、方言英語を嫌ったり下げずんだりする者がどこにしようか。

「私は中学生になって英語の勉強を始めてから今まで、ずっとネイティブのように話すことが最終目的だと思っていたけれど、お話を聞いて伝わればいいのかなあと思うようになりました。世界の国々の人々が独自の英語を話すように多少のミスは気にせず積極的に話していきたくて思っていました。これから英語を使って話して見たいという気持ちが強くなりました。(高2 HM)」

生徒がアメリカ英語のネイティブ指向教育が誤りであることを実感した姿である。さらに彼らには共通語としての変種英語の自然さの原理をわかっている。これこそソシユールの「イディオム観」、方言に対する正しい観点 (ソシユール 2007 p.19) だと思う。これに英語教師はどう応えるか。その対策の一つに、教える側に少々の誤りを容認できる度量があれば、外国語学習の成功に結びつくという研究結果 (Chapelle 1986) がすでに出て久しく、いまや言語教育の常識となっている。

「日本人が思っている英語は、型にハマりすぎていてよくないというのがわかりました。(高2)」

「あまりにも原型の英語に近づけようとするあまりに私を含めて日本人は英語を話す機会を失っているという話に本当に共感しました。ニホン英語がもっと広まってほしいです。(高2 HS)」

白井は「大人になってから外国語学習を始めても、ネイティブのようになったケースが1つでもあれば、それは臨界期仮説の反証になる。(白井 2008 p.57)」というように、知る限りでは今までにそんな人は1人も出ていない。アメリカの標準英語 (現実には存在しないものだが) をそのまま間違いなく使えなどと息巻く人たちは、ソーシャルのラングとパロールの区別がつかない人たちが作り出す幻想である。第一、日本人の学習者にネイティブ英語の必然性がどこにあるか。あるとすれば、せいぜいスパイか物まね芸人の養成だろう。次の感想文は学習者ならではの視点からで生々しく、傾聴に値する。

「…think などの th の発音の仕方がすごく難しく、中学校で何度も練習させられたことがあります。その当時は純粋にまじめに練習していましたが、高校生になるとバカバカしく思いました。小中高とネイティブの先生とともに英語を勉強してましたが、どの先生もニホン英語で100% 通じていたんです。ならばニホン英語でいいじゃないか、と。ニホン英語と言っているけど、英語は英語なんだし、例えネイティブみたいにキレイに発音できたとしても、ほとんどの人は聞き取れないし理解できない。これでは意味がなく、無駄なだけだと思います。アメリカ人にだけ通じる英語を取得できたとして、それが何の役に立つのかと考えたら、何の役にも立たないと思いました。しいて言うならば、アメリカに永住してアメリカで職に就いた時ぐらいぐらいかな?と思います。(大学1 KM)」

「中学高校のネイティブのように気取って話す教師に私は今まで反感のような思いを募らせていたのだが、これは決して間違いではないのだろうと思った。(大学3 YK)」

意識してかどうかはともかく、日本人教師がわざわざネイティブ英語をまねて話すのを不快と思う生徒は多い。幼児にとって関西人の母親が急に東京弁を話すと同じくらいに不自然ととるのだろう。

「英米人のための英語を話しているとか思えないような授業を受けてきたのだと思うと、今まで何の目的で英語を勉強していたのだろうと考えてしまいます。(大学1 KT)

「英語の語順を一か所間違っただけでも0点になりますが、日本人の私でも日本語の語順を100% 正確に話しているわけでもないのに通じます。(大学3 YS)」

彼らの訴えの一語一語には鋭く本能的で、高度な言語感覚が垣間見られる。彼らはいまや裸の王様を「裸だ」と言い張った少年となった。

B. “あなたの英語は通じない” 宣言

ニホン英語は本当に通じないのか。戦時中、軍部は沖縄の島民たちに、アメリカ兵に捕まったら自決しないと殺されるというデマを飛ばした。その噂を信じた沖縄の人たちの多くを自死に追い込んだ。同じように過去にもニホン英語が絶対に通じないと思ひこみ、アメリカ英語が当然できないものと自らを確信したために、英語を諦めるしかなかった人も多い。だが実は最も通じにくい英語の一つはアメリカ英語であるという研究がある

(Smith 1979)。

「中学のとき英語の授業で、“こう発音したらアメリカでは通じないよ。笑われるよ。”と先生が言っていた英語は、現在、英語を使って話す人々の住む国や地域による、固有の英語であったのかと、今日、講演を聴いて思いました。確かにニホン英語は本場の英語と違う部分も大きいかも知れないけれど、それも、言葉が持つ“個性”であり、さらに本場の早口な英語よりも、話しやすく、一番通じやすい英語であると知り、外国に旅行などに行つて、コミュニケーションをとることに、大きな不安を抱えなくてよいんだと思ひました。…分からない語を推測することも今の私たちにできるのだと思ひました。(高1 TS)」

「ぼくは元理系で、数学以外は苦手です。特に英語が嫌ひでした。なぜかというところ、高校のとき、英語の発音のことを厳しく注意され、僕も何とか英米人のような英語で発音を喋ろうと努力しましたが、日本語の発音で慣れてしまつていて、英米人のような発音には程遠いものがあつたからです。これからは意味の伝達に力点を置いて、堂々と英語を話していこうと思ひます。(大学 KJ)」

「日本語の発音で慣れてしまつていて」と書いているように、第二言語習得の比較言語学上の第一言語が第二言語に及ぼす干渉現象の発見は、第二言語教育の誤謬分析者たちが最近1990年代になってやっとわかつてきたことである。驚くことに失礼ながら一介の大学生の彼には、その分析力が備わっている。言語社会学者の W. ラボフは、すでに40年近くも前に、ことばの教師が方言英語を喋る子どもを頭が悪いとか品がないと決めつける人々を、言語学的知識を持たない人々への偏見・差別 (Labov 1983) だと指摘しており、それは世界の常識になって久しい。

「日本人の英語の発音は悪いとよく言われますが、そんなことを気にせず堂々と外国人と話すことが大事なんだと思ひました。これからは自信を持って話せるようになりたいと思ひました。どの話もとても面白くへえーと思うことが多かつたです。私たちの発音が悪くてイギリスやアメリカなどの英語が正しいものだと思ひていたことが一瞬で覆えされました。イチローとかハリポッターの人たちとの聴き比べ的なのが実際に聞けたのも、とても分かり易かつたです。英語を話すというのは抵抗があつたが、その抵抗が少なくなりそうです。自分の話す英語に自信を持って話せるようになりたいです。(高2 OH)」

ここまで見てきたように、たとえ約40名ほどの少数者の感想文とはいえ、ネイティブ英語以外は通じない或いは通じにくいと聞かされてきたという背景が明らかになつたが、そうならば、英米以外の世界中の多くの人々、英語学者や教師の英語さえも当然、互に通じない事態が生じてしまい、それによって英語という言語の窓口がより狭まれて行くのではないだろうか。逆に自分のアメリカ英語まがいの英語が通じなかつた経験を述べているのかも知れない。専門家や教師の一言は大切であるだけに、それは時には躰という名の脅しにもなり、不安に突き落とす。

C. ネイティブ英語が伝わらない音声学的理由

「とても感動しました。単語を一つずつしゃべるほうがわかりやすいのに、とか思ったことはなく、外国人の先生と対話してもこれが本場の英語かあ、かっこいいなあとは思いませんでした。先生のように疑問に思ったことはありませんでした。確かに本場の英語をまねて使っても逆に、かえって通用しないことがありました。私は獣医か動物看護師になりたいけど、理数も苦手であきらめていましたが、視野を広げてもう一度がんばります。(高1 TN)」

これこそがソシユールが、あるがままのことばとして、多様性のある生きた言語についての重要性を指摘する観点 (ソシユール 2007 pp.13-54) を証明している姿である。ネイティブ英語では、英語を母語としない世界中の人たちから“お粗末な発音”と言われかねない彼ら特有の「音声の同化 (Is he → Is'e)」・「消失 (buy it → bait)」・「わたり音 (Cut it out → カッティタウ)」・「余剰音 (sofa is → sofa^{riz})」などで、これらをわざわざ文科省では、格好がいいからだろうか、重要視して無理やり指導要領で推奨する。だが実はネイティブ特有の、場合によっては業務上意図的に相手を混乱に導く荒っぽい、これこそがネイティブ同士以外には伝わらない「意地悪な発音」の理由なのである (末延 2014 pp.152-155)。ネイティブことばを使う英米人が、我々外国語として英語を使う人に対して絶対に使ってはいけないしゃべり方である。それを経験し、このようにしっかりと疑問を持った生徒の独立心に感動する。

「スピード時代とはいえ、…理解できない部分はみんなで助け合い。相手に自分の言いたいことが伝わること (高1 NR)」

相手を思う心を育てるのが教育である。しっかりと育てるのがうれしい。

「今までネイティブの英語が大切だと思っていたので、日本人の話す英語を全面的に肯定するのは新鮮でした。(高2 IS)」

「今までは外国人のような話し方が正しいからそれに近いものを話さないといけないと思いましたが、それぞれに良さがあって、特にニホン英語は分かりやすいと言う事を再確認することができました。この話を日本に留学中の友人にも話したら凄く共感してくれて、実際にそうなんだと感じました。(高2 OA)」

要はまず教授者が英語の多様性の現実を謙虚に学び、それを学習者に示し、選ばせることである。これがネイティブ指向の英語教育に対する本稿の結論であり、目標である。

D. 不安を掻き立てる

「英語を喋ることに抵抗がありました。発音を気にしているからです。でも先生のお話を聞いて自分達の発音にも誇りを持ってもっと積極的にしゃべっていきたくて思いました。文法や構文ばかりを気にせずにもっと喋ることを楽しみたいなあと思いました。(高2 AM)」

クラッシュェンの情意フィルターの仮説によると、いくら input が多くとも、あてられた

らどうしようという不安が動機付けを低下させる (Kraschen, S 1985) という。こうして「下手だから通じないのではないか」という不安が、授業によってむしろ余計に煽られる。ちなみに三歳以前の幼児にはあまり前途の不安感や恐怖感が見られないというのが幼児心理学の定説である。人生経験が2～3年では先のこと、未来を案じる能力や恐怖感がまだ直接経験されないからだ。それがことば学びにプラスになると思われるが、知恵がつく少年期を過ぎるにしたがって「先案じ」という不安がより深くなってゆく。では次に講演の結果、学習者たちの英語学習に対する見方がどのように変化したかを見てみよう。

E. グローバル化の誤解

「今はグローバルな社会なので、英語は必ず身につけることが重要だと思います。(大学 MS)」

「私は、これからはグローバル社会になるから、英語は絶対に必要だなあと感じていました。しかし、その思いと同時に、欧米人たちが話すように話せるのかと疑問を持っていました。末延先生は最初の授業から、私の不安を吹き飛ばしてくれました。(大学 M.S.)」

今までのように英語の要・不要論や、実用か教養かといった議論を越えて、生徒や学生たちが国際化を肌身で感じている今、もはやそうした選択の余地はないことを決意し、宣言している。しかしともするとこれは屁理屈となる。名古屋のある大学教授が講演で国際化に従って今よりもなおいっそう日本の英語教育は一丸となってアメリカ英語を忠実に真似ることが要求される時代に入ったと言った。一見そうかと思ってしまう学習者も多いだろうが、世界の現状に無知で無責任な証拠である。国際化とは、従来よりもっと多様性を重視することである。次の感想文に見られるように、生徒の方がもっと分って納得している。

「英語についてこれから生きていくうえで大切なことを教えていただけたと思います。英語をアメリカ人のように完璧にする必要はない、自分らしい英語で話せばいいということ…が分かりました。(高1 NO)」

「英語を見る目が変わりました。大きく変わりました。以前から外国の人に伝わりやすい英語こそが1番重要だと感じていましたが日本人の英語、日本特有の英語を重要だと思うようになりました。(高2 KJ)」

「とても共感するところがありました。自分は自分らしく生きます。(高1 MY)」

F. 相手がわかるように話す配慮の欠如

ことばは社会から生まれた

「スピード時代とはいえ、…理解できない部分はみんなで助け合い。相手に自分の言いたいことが伝わること… (高1 KS)

「少しでもネイティブのような発音で話せるようになりたいなと思っていただけ、分かるように発音することも大切だなと思いました。(高1 KH)」

違う考え方を持つ相手がいる。その相手を考えることの大切さ、ことばは助け合いの道具である。

「僕は英語の発音に自信がなくて、アメリカ人たちと話せないと思っていました。…理解してくれることが分かりました。(高1 OM)」

こんな時、会話では相手が、I know what you mean. と言ってくれるのが常である。

「自信を持ちました。grammar school のホームステイの受け入れを2回したことがあります。つたない英語で一生懸命話したら相手も努力して理解してくれました。つまりはそういう事なんだなあと思いました。受験英語に疑問を持ちました。(高2 TM)」

ホーム・ステイでふと日本語で「もう寝るかなあ」と言ったら、さっと電気が消えたという。通じたのだ。言語習得は知識の積み重ねではなく、スノボーのように人もスノボーもシンクロナイズすると同時に発車し、素早く飛び乗る訓練が自動的に行われるのではないか。このような素朴な学習者たちの英語学習の在り方を、“やはり変だ”、という直感は、遠い記憶、本能を学習者が以前から持っていた視点かどうかは筆者は知る由もないが、少なくとも筆者が講演を通じて想起させた結果かもしれない。

「先生の講義を受けていなかったら、私は American English を強制されることに何の抵抗もなく、米国の思うままに操られてしまうところでした。世界観も少し変わりました。(大学 KK)」

「完全でなくとも中・高の英語教育で、ある程度の英語の知識はつけました。せっかく時間に余裕のある大学生になったのだから、海外を訪れてみようと思います。その際は自分の英語に自信を持つまでには行かないまでも、誠意を持って相手に何かを伝えたいという気持ちでチャレンジしたと思います。末延教授の授業と、今回の講演によって、海外旅行はしっかり英語力をつけてからと思っていた私に、そんなぐずぐずしている暇はないんだ、と気付かせてくれたように思います。(大学 KT)」

「私は今まで、ネイティブの発音はカッコいいし、自分もあんな風にしゃべれるようになりたいなあと考えていましたけど、…アメリカやイギリス人が今のままの発音を続けると、やはり誤解が生まれやすいと思いました。(高1 MM)」

高校生とはいえ、忠恕(ちゅうじょ)の心、英米人の将来にさえも気を遣う優しさと余裕を持っている。そこまで危惧してあげているところが、日本人の優しさ、細やかな心遣いであろうか。

「私たちは英語を学ぶけど、英語を母国語とする人はいろんな国の人が話す英語を理解できるように学んでも欲しいと思いました。(大学 KJ)」

これこそが互いに相手、相手国を思う心、国際理解の基本であって、その精神が実現されているのがニホン英語である。

G. 教授者側の基本的言語学知識の欠如

心とことばの自由を奪う学校英語

「本当の“生きた英語”とは何なのか。生きた英語とは、流暢な英語を意味することではなかったのです。“生きた英語”、それは自分の伝えたいという思いを、英語という言葉の中にどれだけ強く、そしてどれだけ正確に込められるかということだったのです。私は先生の授業を受けなければ、こんな簡単なことにも気づかず、一生英米英語というものにとらわれて、相手に思いを伝えられない愚かしさを感じていたことでしょう。(大学 KO)」

ソシユールのパロールの原理について言うなら、河を知るには上流に、それとも下流に行けばいいか。彼らは上流しか見ていない。後述するが、源流は一滴のしずくからと、どの河も同じ様相をしているが、河下には人間の生活と生き生きしたことばと文化がぶんぶん^まと匂ってくる。それでもさらに百年の河清を俟つか。

以上の生徒たちの感想のように、日本の英語教育の問題点の一つは、負の動機付けにあることが分かった。それは、たとえば白井も日本人が英語に弱いといわれる原因は動機付けの弱さにある(白井 2008 p.73下線筆者)と指摘している。

だが、万が一、自分の心の片隅にニホン英語を使う人は怠け者で、ネイティブ英語を使う人は努力家という考えが少しでもあって、それに加えて、英語はアメリカ人の所有物だから正しいネイティブ英語こそが英語教育の目標だとする観点が当然のこととしてあるとすれば、異種英語、なかでもニホン英語の存在という現実の世界を啓蒙する必要もなく、かりに知ったとしてもあえて生徒には知らしめず、というのが教育現場に一番波乱を起こさない生き方なのかもしれない。だが、教育権の行使が仲間を守ることではないことを深く肝に命じなければならないことは言うまでもない。さて本節の最後にネイティブ英語教育批判を紹介する。

「ネイティブたちが自分の英語の微細をそのままに他の民族に押し付けるとすれば、それは傲慢だ。(高1 KE)」

まさにこれは皇国・軍国日本が台湾を統治していた当時、国際的な愚策として知られた「日本語教育政策」の土台となった言語観だが、これを文部省はそっくりそのまま日本の「英語教育政策」に移行、現在に至っている(末延 2017)。思うに、日本ではネイティブ英語を押し付けているのは誰だろうか。断っておくがそれは英でも米でもない。文部(科学)省の新旧学習指導要領が“正しい英語を”という動機づけをくり返し示し続けてきたように、そしてその「正しい」という言葉が暗に“アメリカの正しい英語”に結局は限定され、言語差別を誘引するに他ならない。こうして日本国自身がアメリカに付度してアメリカ英語を日本の英語学習者たちに押しつけているというのが現実であるが、教授者は学習者の「真理を知る権利」を拒否してはならない。

そのアメリカでは、すでに1968年に移民の子どもたちのために英語力の弱い子どもたちが学業面で不利を被らないような措置として「バイリンガル教育法」が義務付けられ、施行されている。政治家のみならず、言語の権力を握る人たちの恐ろしさは、ともすればこうした付度のパワーによって強制的に、しかも簡単にさせて範疇化してゆくことである。では次章ではことばの多様性について、教育の現状と学習者たちがどのように英語を捉えたかをさらに詳しく見て行くことにしよう。

(2) 多様性

A. 英語の多様性

スケートの小平奈緒選手はまだ20代の名選手だが、自分の選手生活を振り返って「与えられるものは有限、自ら行って得るものは無限」という名言を与えている。そこには厳しい訓練 (知識) の中で培った精神から、広く多様性を知り、そしてそこから独自の発想 (知恵) が生まれ、個性が育つという好例を示してくれた。筆者はこれを日本とは無関係の英米文化の所産である「ネイティブ英語」のマネ事と、日本文化、日本人の心からほとばしり出る知恵がもたらした「ニホン英語」との対比と見る。後述するが、人は自分の心から、単に有限の「知識 (knowledge)」の程度ではなく、はては無限の「知恵 (wisdom)」を学ぶ。その「知恵」こそが「無限のことば」を作り出すというのが筆者が主張してきた世界の異種英語の一つ、「ニホン英語」である。

「英語には色々な国の持つ独特の英語があってその数64。あんなにたくさんあったことに驚きました。今まで下手な英語を恥ずかしいと思っていましたが自信ができました。(高2MK)」

現在世界中で使われる英語の変種は、数えるだけでも少なくとも64種以上ある (本名 p.4 1990, 末延 p.10 2012)。英語にそれぞれの国の人々の独自の言語と文化が取り込まれたユニークな「知恵の結晶」である。当然そこには「ニホン英語」も含まれ、世界で認められている。ソシユールのイディオム (固有言語) (ソシユール 2007 pp.19~) の観点から見ても、確認されているだけでも実際はその数十倍もあるだろう。これらの生徒たちの自信には、こうした正当な個性と多様性の重要さが理解できる能力が備わっているとみられる。

「発音が悪い」とか教師の何気ない一言は、それが微細な例を除いて学問的に検証されている事実ではないという前に、時には脅しにもなり、真面目に学習する生徒を不安に突き落とす。しかし当の教師たちはこうした脅しこそが生徒の反発心から意欲へと学習の強い動機づけに繋がると信じている。だがそのからくりが実は高校生にとっては真正面から真剣なもので、成績に、果ては人生設計に繋がるだけに、事実として受け止めざるを得ない。単に良かれと思って実行するこうした生半可な、中途半端な言語学的・心理学的作戦

ほど恐ろしいものはない。教育において思考停止者が新たな思考停止者を連鎖的に造るという悪例である。

今世紀に入ってもいまだにネイティブ英語を称賛する英語学者、教師が日本にはいかに多いか。これがあらゆる言語差別と屈辱を生む。方言を使う者同士ではお互いにその特徴がわかるが、それをおかしいとは思わずむしろ努力の結果と見るから、互いがことばの表層より内容・意味を大切にするので問題は起こらない。しかし教師自身は生徒にはそっくりそのまま英米英語の表層をことさらに真似させて、それを試験に出す。正解を唯一つとするセンター試験もしかり、日本ではこうした学習者の人間としての尊厳を喪失させる屈辱の言語教育が、修正されないままに少なくとも一世紀近くも続いている。文化人類学、言語学、そして人道上の考え方を、生徒たちの人生の生き方にまで応用して広めることこそが英語教師の責任であり、ことばを通じて人類が平和のもとで互いに生き延びる道である。

「先生の話聴いて、英語を勉強としてではなく、ことばとして認識するという考えに変わりました。…今日の講演会は教科書では習わないような、いつもとは違う英語だと思いました。僕は紙の上の英語しか知らないんだなと思いました。世界に出て初めて、今まで学んできた英語を活用できるんだなと思いました。(高1 NI)」

“英語を勉強としてではなくことばとして認識する”というこの生徒の観点も20世紀言語学の土台を築いたソシユールと共通する。若き日に世界のあらゆる人々のユニークな英語と接してきた筆者にとって、ことばの教育に携わる人々を世界の舞台に出させる前に、言語の理論武装をかざす前に、教師が国際英語としてのニホン英語という理の適った形の英語を土台として、ありのままの世界で使われるさまざまな英語の現状をも謙虚に学ぶとともに、今こそことばの本当の姿、つまり自己の英語が単に知識の詰め込みではなく、日本人の知恵の結晶としての「ニホン英語」であることを生徒の前で堂々とつまびらかにし、それを授けるのが真の教師の役目ではないだろうか (末延 2008) と考えてきた。今回のアンケートを通じて、生徒・学生の一文一文が暗に英語教師に求めているのは、この事実を明らかにすることであろうと筆者は確信してきた。

B. “自然なことば”の定理が学習者の中に見える

「英語は話される場所によっていろいろ異なっていて、日本人の場合はニホン英語を話せば良いとおっしゃっていたのを聞いて、確かにそうだなと思いました。別にアメリカ人が喋るようにしゃべらなくても日本人なのだから日本人らしく話せばいいと思いました。(高1 KT)」

「以前その国独自の英語 (例えばニホン英語) を広めようというような内容のテレビ番組を見て、世界にはいろんな英語があるという事は知っていましたが、今回の講演でそれについてさらによくわかったと思います。私たちが日頃習っているのはアメリカ英語ですが、アメリカ英語が必ずしも全世界でのスタンダードではないし、その国の個性や文化が求められていく時代だと思うので、こ

れからは日本の英語を習って行けたらいいのになあと思いました。(高2 KM)」

「今日の講演会で思ったことは、英語というのは多様であることです。世界共通語として使用されている一方で、その国によって発音が違ったりしているところが、とても衝撃でした。また英語は類推力が大切ということを知り、自分で考えることの大切さが分かりました。(高1 TM)」

自分の観点と共通していることに感動したのであろう。世界に共通してソシユールの言語観がそうであるように、方言の発生とその発展は自然で正常であり、ニホン英語も同じく自然発生的で、そこには英語の中に日本語の要素が組み込まれるのはごく自然なことである。

「ニホン英語以外にも世界上には他の似たような英語がたくさんあるのは知りませんでした。ネイティブの英語は母国語として話すので聞き取りにくいと思います。(高2 KM)」

「アメリカやイギリス人の話す英語でわかりにくいと思ってる人が他の国にもいるとわかって安心しました。分かり易く伝えるということが大事なんだと思いました。(高2 IS)」

こうした考え方を共有することが、互いに助け合った平等な世界平和を維持するための根底となる。ところが世界の人たちがネイティブの英語を振りまく、一国主義の横暴性に困惑しながらも、それを知恵を以って乗り越えている国民が多いことがわかった。日本ではそれに溺れていないか。

「実際にアメリカの映画とかは全く聞き取れないけど、先生のニホン英語なら話す言葉も聞き取りやすいと思う。日本語にも大阪弁などの方言があるように、英語にも訛りやその他の地方独特の話し方があってもいい、許してもいいのではないかと、言う話にはとても感動した。(高2 TM)」

方言という言語を通じて多様性の中でこそ、より心豊かに「ともに生きることができる」ことを忘れた人間のコミュニケーションの観点を、鋭く指摘している。明治の教育者は国民に標準語を習得させようとして方言撲滅運動をしたが、英語方言としてのニホン英語もいまだに同じ運命にある。生徒には話せばわかる。ある言語差別問題の研究者は、方言を差別する人は、そのなまりで話している人個人、および人種・国籍・社会的地位なども差別していることになるかと批判している (Lippi-Green 1994) という。彼らは結局、巡り巡って自分の能力・人格さえ無視している。それはニホン英語を拒絶する者にも通じる。

「今までネイティブの話す英語だけが本当の英語かのように思っていたけれど、色んな英語があっ
ていいんだと思って英語に対する見方がよくなった気がする。英語が決してネイティブのような英語を目指す必要はなく、相手に伝わるような英語を目指すことが国際化した今大切だということに気づかされた。他のアジアの国のように日本も自分たちが話すニホン英語に誇りを持たば良いのだと分かった。(高2 IN)」

「英語の見方が自分の中で少し変わりました。とても面白い着眼点で物事を見る事そして見ていたのですごいなあと思いました。(高2 NJ)」

「世界でアジア人が一番多く英語を話すことを知ってとても驚きました。(高1 YK)」

「英語に対する見方が大きく変わりました。世界の各地で英語が方言のように違うことや、その中でも日本の英語はとて世界にやさしい英語であるという話は、とても興味深く面白い考えだと思います。これからは日本の英語に誇りを持ちたいです！とても印象深い話でした。将来世界共通語は英語でも日本の英語になっているかもしれないですね！ (高2NT)」

「最初はなんで上手でない英語を勧めるのだらうと思っていたけれど、ニホン英語という考え方を理解した時、そんな考え方もあるんだと感動しました。本国の英語よりも日本人の英語の方が全世界では通じやすいという事にも驚きました。自信を持って英語を勉強していこうと思いました。(高2KU)」

こうして世界にはそれぞれの国の文化に則した言語が醸造されてきたということが理解できると、次には、世界には様々な英語があつてしかりということが分かってくる。

「日本人以外の国の人々は、自国独自の英語を堂々と話している、ということを聞いたときは感銘しました。僕が思うに、日本人はグループ社会、つまり自分と同じ考えを持つ人々でグループを作り、みんな他の人がやるなら私も、といった具合で英米の発音だけが正しいと思ひ込み、自分自身の“個”というものが欠けた人種だと思います。(大学TS)」

偏見と差別を見抜いている。英米以外の英語の多様性を認めない人々は、方言の存在さえ認めない。となると自分の日常使う方言さえ認めないという自己矛盾に陥る。もちろんニホン英語も認めない。一方、生徒たちはこのようにことばを巨視的に観ることによって、ソシユールのようにことばの多様性を見抜いたのである。

C. 大学生の感想

では本章の最後は大学生の感想である。この21世紀の今、日本で理想の英語教授法の矛盾を鋭く突きながら理想の言語観を求めて苦悩する大学生たち自身の感想がここに垣間見える。

「僕が中学生の時から英語に対して持っていたもやもやしたものを代弁してくれているかのように感じました。…今の中学高校の英語のせいで若者たちの英語に対する興味が失われることは非常に損で、もったいないことだと思います。(大学DY)」

「先生の考えというのは、すごく当たり前だけど、今まで私が生きて、英語を勉強してきた中で初めて目にする**ことば**だったので驚きました。中学高校と細かいことを言われ続け、気がつけば英語が大嫌いになっていました。(大学MA)」

「英米人のための英語を話しているとしか思えないような授業を受けてきたのだと思うと、今まで何の目的で英語を勉強していたのだらうと考えてしまいます。(大学KT)」

「英語の語順を一か所間違っただけでも0点になりますが、日本人の私でも日本語の語順を100%正確に話しているわけでもないのに通じます。(大学YS)」

ほぼ10年間もの英語学習の後、「こうすればこうなる」という希望もなく、「どうしてもど

うにもならない」という閉塞感が漂う。

D. 英語への関心度の変化

a. 英語は苦手が好きではない

まず、英語が苦手な人たちがニホン英語をどのように受け取ったか。講演前と後の関心度を調べてみた。

「私は英語が苦手が好きではありません。…私の中で将来英語を使って何か仕事をする事は無いと思いますが、外国に行く機会があればニホン英語でも自信を持って使ってきたと思います。(高2OM)」

このように自分がすでに末永い将来にわたっても英語とは縁を切っていると決めつけているところに悲しさがにじみ出ている。このままでは英語教育は若者の将来に蓋をすることになるが、ニホン英語にかすかな希望を見出してくれた。

「英語は中学生の時から苦手意識があり、高校でさらに難しくなると聞いて、不安でいっぱいでした。でもその不安が少し和らぎました。…どれだけ苦手意識を和らげてくれるかを知りました。(高1KM)」

受験のための英語では、このように追い込んでゆくのだが、ソーシャルの観点から言うと、社会生活を送る人間は、成長とともに自然とコミュニケーションの度合いを深め、濃い中身を求めるようになり、それにつれてことばも複雑になる。しかし逆に言葉・文法の方が先導してさらに難しくさせるような観点のもとでは、本末転倒である。ことばというものは本来人間にとって空気や水にたとえられるように、好き嫌いなどありよう筈がない。

「私も英語が大嫌いで正直今回の講演は憂鬱でした。しかし文の切り方など教えてもらい勉強になりました。私も外国語がバラバラと話せるようにはなりたくないです。単語単語で話を通じればそれで良いと思います。しかし努力することも必要なだと学びました。色々英語について考える良いきっかけになったと思います。(高2OH)」

このような学生をどのように救うか。英語学習の目標がこれであってはいけないのだろうか。生徒にアメリカ英語の完璧性を求める限り、そこにはどっちつかず(ダブル・リミット)の危険性がある、と白井(2013 p.60)は警告する。現実には教師たち自身がニホン英語を使っているという現実を認めない中で、バイリンガルの幻想によってネイティブ英語を押し付けられている彼らは、青年期の大切な時期に日本語も英語も中途半端に終わってしまうことになる。

b. 英語は好きだが成績が悪い^{注2)}

次に英語は好きだが成績が悪いというケースを見てみよう。

「私は英語が苦手科目です。ですが英語は1番好きな科目です。そろそろ大学受験のこと考えると好きな科目で点がとれないというのはどうしようかという思いが最近はありました。しかし講演

会を聞いて何か嬉しくなりました。勇気の出るような話が聞けて良かったです。英語がより好きになるように頑張ろうと思います。(高2KN)」

英語が好きなのに、点数が低いというパターン。これが多いが試験が文法や訳読ばかりでは当然の結果である。ルール of 正確さばかりを過度に試問するから当然そのような結果になる。「苦手だが好き。」この感想には多少救われる。“うどんは好きだが、うまいうどん屋がない”というのが現状だ。生徒たちは学習権としての選択の余地が奪われている。次に得意ではないが嫌いではないというタイプがある。

「僕はあまり英語は得意ではないのですが嫌いではないので頑張って勉強しようと思いました。英米人の英語より日本人の英語の方が理解されやすいことを知って驚きました。(高2KY)」

このような生徒たちが少なくない。彼らにこそもっとニホン英語で自信と勇気を与えて救出できないものか。次の2文はそれをうまくまとめている。

「英語は好きだけど学校のテストなどは全然点数が取れなくてどうしたらいいのかなあとかすごく考えていました。だけど今回先生の講演を聞いてそんなことを気にしなくていいんだと思うことができました。映像とか具体例とかを用いてとても分かりやすく楽しく聴くことができました。英語がもっと好きになりました。本当に良い刺激と新しい世界観を知ることができました。(高2YS)」

「英語に苦手意識がありました。しかし①ことば、英語は多様性があり、②言葉はわからなければ意味がない、③ニホン英語は分かりやすい、ことを学んだ。…これで安心しました。(高1NT)」
逆説的になるが、もしニホン英語で生徒たちの英語の苦手意識が和らいだとすれば、今まで何だったのだろう。今まで誰もが英語が苦手になる方法を学んできたことになる。自然に進む筈のことばの学習が、前へ進むどころか学校教育の場で抑止させられてきたというのか。次こそその問題の深さを実感させる文である。

「私は英語は好きですが成績は悪いです。英単語や時制の一致の単元の現在完了過去完了などがグジャグジャになってどうしても覚えられません。でも英語を話せるようになりたいのでどうすればいいのかよくわかりませんでした。先生のおっしゃっていたような英語の勉強方法をいつかやってみたいです！高校の間はおそらく無理でしょうが…。フィーリングで英語を話せるようになりたい!! 好きなのにできないのはとても悲しいです。(高2SH)」

教師に言われてきたとおりに、ネイティブ英語をひたすらに真似て努力してきたのに、成績は悪く、努力の結果は好きな英語が話せるかも知れないという兆しささえも見えてこないこの閉塞感。教育する側のことばに対する根本的な観点の間違いによって生じたであろうこのような、真面目な、正直者が損をするような教育は有ってはならない。

c. 英語が好き

英語が好きな人たちがニホン英語をどのように受け取ったか。アンケートでは好き嫌いを問うたわけでもないから、正確には英語の好きな生徒の数は出せないが、積極的に好き

だと書いた生徒はほんの数名にすぎなかった。

「私は元々英語が好きで興味があって将来留学もしてみたいと思っていたのですが面白かったです。英語の発音が良くなりたいたいと思うけれどニホン英語でもいいんだということがわかってよかったです。(高2KS)」

誰もが世界の未知の人たちと、世界で通じるという英語という言葉を通して交わり、楽しみたいと学びたいと思ってきた。そんな教室で、自らが積極的にアメリカ人の英語をそっくり厳格に真似したいとまじめに思っている、と記入した人はいなかった。ただそうしないと通じないと言われるままに、今までそのことばを信じきっていたのである。

d. 受験英語をゲームとして

ある高校教諭は、特に大学入試の文法や発音問題の愚かしさは生徒たちも薄々わかっているのに、それをごく限られた視点として英語を「受験ゲーム」として割り切って学習する生徒たちがいると指摘してくれた。

「今の英語教育に意味があるのかと聞かれると答えることができないが、何のためかと云うとやはり受験のためだと思う。今日の講演を聞いて自分が関わっている英語は本当に狭い世界で、これが英語の全てではない。語学とはもっと広い世界なんだと思った。高校では受験英語をしっかり学んで社会に出てから実用できる外国語を大学などで身に付けたいと思った。(高2OM)」

これからの人生にそれを生かしてほしい。しかし、現実を見ると、大学に行けば理想の実用英語が学べると信じていることが悲しい。

e. ニホン英語に否定的な意見

「ニホン英語を称賛していたけれど、自分は時代の流れに乗ってネイティブな感じに話すほうがいいと思います。ばかにされて相手にされないよりは、伝わる人数が多いほうがいいからです。…日本語英語のほうが通じる人には使えばよいと思うけど、英語圏に入ればその場にあう英語を使うのがベストだと思いました。(高1N)」

「英語が好きなのに少しでもネイティブな英語に近づきたいといつも思っていたのですが、伝われば良いと言うポジティブな考え方に納得できました。でもやっぱりどうしてもネイティブの英語をマスターしたいです。(高2MS)」

「私もネイティブじゃないと駄目なんだと考える人でした。ジャパニーズ英語でもいいなんて話は一度も聞いたことがありません。…しかしやっぱり公用語として使われている英語をしっかりと話すべきだと思います。(高1KM)」

以上のようなニホン英語に賛同できないという意見は上の3例に見られた。アンケートで賛否を問うたわけではないので、こうした意見は全体の1%足らずに見られた。ニホン英語に否定的な英語教師のほぼすべてが、彼らとほぼ同意見である。このようなネイティブ英語に対して根強い希望を持つ生徒も教師にも当然、多様性という面でも、個人の自由と

いう権利があることは保障されてしかりである。しかし、逆に日本の英語学習者全員がネイティブ英語の発音を真似なければならないという義務もないことも事実である。

f. 英語を楽しみたい

「自分の国の独特の発音で英語を話しても、他の国の人たちに伝わる、むしろその英語の方がより伝わるということにとっても驚きました。また、自分のいいたいことが相手に伝わったらいいいので、文法や発音が悪くても、前後のことばで相手に伝えると考えると、すこし英語が楽しいものに感じられました。今日で英語に対する考え方が大きく変わりました。英語で本当に好きになるためにたくさん学びたいと思います。(高1MR)」

「英語の楽しみ方を知りました。(高2KK)」

「英語でも国々によってさまざまな違いがありこれから将来英語だけでなく色々な語学を学んで行くことが大切なんだなあと思いました。(高2KU)」

若き日の夢を若者に託すためには、完ぺき主義よりも早くからニホン英語の発想と知恵、精神が重要なゆえんである。

今まで見てきたように、生徒たちが、若き日の筆者のように、いわゆる文科省のいう“正しい英語”や“ネイティブ英語”に悩まされてきたのが、意外にも、世界にはさまざまな英語があることの面白さ、身近さがわかると、英語のみならず他の言語学習そのものの楽しさが増してくるようだ。その楽しさは、何十年たっても英米人たちのようにはろくには英語ができない筆者のようなネイティブ英語に惑わされてきた者から見ると、実に堂々と純粹でほほえましく、うらやましいものがある。英語だけでなく身近かで大切なアジアの同胞の諸言語をどれだけたくさん学べるかといった若き日の意欲が薄れ、どの言語もせめて無様な自分の英語くらいにはと思いつながら、中途半端な終わりを迎えるわびしさと裏腹に、いまだに英米英語だけが世界を動かすなどと日頃誤解し、西洋合理主義に陥って生徒や学生を導いている人たちがもし仮りにいるとすれば、そしてそんな人たちの幾人かが、万が一、日本の将来を担う若者の語学教育を動かしているとすれば、筆者は一教師としてながらそれを黙視できるわけがない。

g. 希望が見える

「自分は英語が嫌いで、でも必要なのはわかっていました。この講演を聴いて私は下手でも文法が違って発音が違って外国の人とコミュニケーションが英語でとりたくなりました。外国へ行って自分の英語を話してみたくくなりました。ニホン英語ははっきりした発音で他国の人々に伝わりやすいと聞いて無理に今まではつなげるとか早く読むとかを意識していたり、それがカッコイイと思っていたけど、そんな事をしなくていいとわかりました。英語が話せたくくなりました。もっと頑張って英語勉強します。(高2HK)」

文中の「話せたくりました」は「話し」の間違いではなく「話せ」である。この違いか

らこの生徒の心の変化が読み取れる。本来の自分が好きだった英語を「ニホン英語」の存在を知ることによって取り戻せたのである。ソシユールの観点からすると、ことばは社会生活をする人間にとって好きか嫌いかというような対象物ではないし、個性という観点からすると上手下手も存在しない。

4. 心の自由が知恵とことばを生んだ

(1) 人はどのようにしてことばを学ぶか

8人目の孫ゆうなは2歳前頃には最初のことばの一つ“美味しい”が言えるようになった。孫が生まれるたびに思うのだが、ほんの例外を除いて、子どもにことばを授けるのに失敗した親はいない。ごく普通の条件の中で人は2足歩行ができるように、一歳前後にはすでに親のいうことばに身体で反応する。これは親のことばを聞いて理解できることを意味する (Asher 1982)。そして2～3歳頃までには相当の発話が可能となる。今3歳の陽生は「これ、きのう母さんがスーパーで買ってくれたおもちゃ…」と関係代名詞講文が使えるのだ。

ところがなぜか不思議なことに言語教育の世界では、成功はさておき、不成功の場合の「なぜか」だけが重視されてきた。母語の学習の成功度はほぼ100%であるのに、なぜ第二言語の場合は思い通り、願い通りにならないのか。これでもかこれでもかと詰め込んで失敗すると、その度にそれ以上に詰め込まねばという悪循環が廻る。

日本の学校英語教育で今も続く数千万人を対象とした負の実験、すなわち6～10年間、いくら英語をやっても不成功という全国レベルでの約百年にわたる汗と血にまみれた被験者の“貴重”な実験結果を、それが例え負の結果といえども、いやむしろ負の学習結果であればこそ、言語教育の面でもっと貴重な結果として取り扱わねばいけない。

話の最初に戻ろう。幼児の母語教育はなぜほとんど成功するのか。これほど不思議なことはない。逆説的に、違った見地から、自然で苦しみのない、いわんやほとんど100%に近い成功率を誇る幼児のことば学習法を見習うといった謙虚な方法を自然の中に見つけ出し、試すことはできないだろうか。

(2) 子どもとことば

さて、胎児から2歳児を過ぎるころまではことばの吸収時期となるが、ほとんど寝たまま、あるいはすべてが受動的に見える。じっと眠ったままでも、脳神経は意識下で大活躍をしているのであろう。

胎児の耳に触れる音や声は、音楽を聴くように束として入るものと思われる。指揮者の

バーンスタインはたまたま聴いたことのない曲を指揮することになったが、不思議なことにその曲が頭脳に現われ、自然に指揮ができたという。後にその曲が母の胎内にいる時、母がよく聞いた曲だったことがわかったという。

幼児から人へと育つうちに、1歳の後半頃までは親のことばを耳で嚙んで含むように取り入れる。この際には意識的な訓練は必要ないままにただ耳に入るが、最近の研究では幼児は言語習得の初期からなかでも親の声に激しく反応するだけでなく、なまりに関心を持ち、自分と同じ方言に敏感に反応するという (Kinzler 2009)。自分の環境特有の音声の特徴をしっかりと認識しているという証しであり、同時にそれ以外のなまり (英米英語) を雑音として排除している。このことは今後の外国語学習全般に大きく正の動機づけとして関与することになるだろう。

そして幼児の脳は何の言語的、音声的文法的知識もないままに、自然と親の発した音声 (ニホン英語) とともに、それらをまるで咀嚼^{そしよく}するかのよう^{そしよく}にそこに含まれる語彙や、さまざまな文法規則が振り分けられて分解し、食べ物の養分を運ぶと同じようにそれぞれの項に分類して適材適所に配給してくれるのではないか。脳はそれを貯め込んで、自然のうちに運動神経組織と統合して文法構成し、それが知識としてではなく知恵となって、時が来ると今度は人は肺・口・舌を使って声を出し、その声の自らが反応、驚き、歎び、適材適所にあわせて自動的に喋るようになる。

これはチョムスキーが主張するような宣言的な音声・文法を単に受動的に受け入れた「生得」や「知識」ではなく、手続き的な「知恵」として貯蔵されたものが自動的に発揮できるよう組み込まれ、プログラム化されているものと推定されるからである。これを筆者は「仕込み説」 (*Preparation Theory*) と呼ぶ (末延 2005, 2006, 2018)。

(3) 「まま食うも月日、もの言うも月日」

筆者は少年時代に母に英語の先生になりたいといたら、「あんたがものを食べたら自然に大きくなるように、ことばも自分のまわりの声を“見聞きたべて”成長する」といった。食べ物を食べるといえば確かに成長と結びつくが、ことばは食べたら成長するというようなものとは違って、もっと複雑なものに違いないと考えていたので、その時はあまりピンとこなかった。

今から思えば、ものを食べてその美味しさに驚き、喜び、感動し、感謝しているうちに心が育ち、自然と身体が成長するのと同じように、ことばも耳で嚙んで含んでその活発さやリズムに驚き、その美しさや便利さを不思議がり、「好奇心」を抱いて感動し、それをもとに豊かな感情、心を蓄え育み、そしてついにはそこから舌・口を使って、そのことばをはき出すことに驚き、まわりとともによこび感謝しているうちに、自然にしゃべれる

ようになるということだろう。これは人から単に形式的、受動的に教わった結果、「知識」として得られたというより、教えもしないにもかかわらず、間違いなく幼子の自らの「知恵」から生まれたものと確信した。チョムスキーはこれを「生得的」と片付けるが、筆者はむしろ長い年月の末に手続き的に仕込まれた「知恵」と置き換えたい。これによって心が育つとともにことばが相補的に育つ。こんな時、単なる知識の詰め込みはむしろ消化障害となるのではないか。

こうして一匹のミミズから人間に至るまで、すべての生物のいとなみがそうであるように、私たちは物を食べて咀嚼して、喉を通ったら、その後体内では本人が何の身体的・解剖学的・保健的知識も持ち合わせていなくても、何もしなくても、この精密で微細な設備である消化器官のことを私たちが何一つ知らなくても、体内で勝手にやってくれる。それぞれの内臓が、自然とその食べ物の栄養を振り分けて分解し、それぞれ適材適所に分配してくれる。

幼児の寝返り、首すわり、はいはい、飲み込み、噛み砕き、歩行、等の行動にはいちいち細かい練習が必要か。水泳さえ、臨界期までは自分で浮くことができる。口から入った食べ物であることばを、自然に任せることなく消化を促進させようとわざわざ喉や消化器である胃やお腹をさすようなことをするのか？ ことばもルールをいちいち教え込むか。基本的には人間の幼児はそれらを自ら機能させることができる。実はその間も、胎児は生まれる前から親の胎内で親の声を聞いている。これが「知恵」の賜物であって単なる机上の「知識」ではない。

逆に知識としてその構造や機能を詳しく知っているがために、神経を信頼するというよりも、うまく機能しているかどうかばかりが気がかりとなって、神経がすり減って衰弱することもあるだろう。生徒たちが「英語の発音や文法で頭がいっぱいになって口から声が出ません」といった感想を持つのは取り入れた、食べ過ぎた「知識」が消化不良を起こして嘔吐する姿である。

人は物を食べて成長するお蔭で、自律“神”経と呼ばれる、大自然、世にいう人間の創り主である“神”の分身が、人間の身の内に入り込んで一日24時間100年近くまでひと時も止まることなく活動してくれる。人の祖先が何千、何万年にもわたって続けてきたこの作業は、願い通りや思い通りといった次元のことではなく、まさに心通り、つまり大自然の摂理に身を託すことに他ならない。大自然からの借り物の身体に任せておけばいいだけのことである。これこそが「知識」(knowledge)を獲得したのではなく「知恵」(wisdom)を授かった姿である。この世界が“神のふところ住まい”といわれるゆえんである。ありがたいことである。

(4) ことばは自由

「英語って言葉って、思ったより自由だなと思いました。…ことばは自分の思いを伝えるためにあると思うので、難しい言葉を使ったらいいのではなく、国境を越えた人に伝える時は、より確実な、よりにくいことばであるべきだなあとと思いました。(高1 HR)」

言葉は自分だけでなく互いのためにある。これはいままでの発音や文法からの束縛からの解放を意味している。胎児から幼児、青年ら若者には言語の本質を見る目がある。すなわちこれはことばを使う人類の知恵と推定される。

(5) 手を加えてはいけない

では母語と同じく、言語という範疇にありながら、人間は心の自由を持ち、十分に十柱の守護を受けておりながら、それに頼ることなく、なぜ外国語となると、これほどまでにルールを教え込まねばものたりないのだろうか。

カブトムシの幼虫の蛹室 (ようしつ) の構造とその役目から学ぶことがヒントの一つである。カブトムシは蛹室という部屋の中でサナギになり、地上に出る前にその中で最後の時間を過ごす。その部屋を人間が少しでも手を加えるなり破壊すると、細菌などによる感染によってカブトムシの幼虫は死んでしまうといわれる。

以上述べた(1)~(5)の事柄から次のことがいえるだろう。

- A. 人は母親の胎内で生を受けた瞬間から、目には見えない生得的に自由な“心”を持つ。それは脳を通じて生得的機能である耳、目、口、といった感覚器官を働かせ、周りの環境の助けを受けて言語習得のための知恵 (wisdom) を仕込み、ついにはその知恵をもとに人は言語を習得する。こうしてことばの元となる知恵は、心の自由のもとにこそ仕込まれ、育まれる。
- B. 幼児・子どもは偏向した固定観念がないからこそ、怖いもの知らずだからこそ、このように自然から授かった自由をもとに、大人が教えもしないのに、自ら (いや、教えないからこそ) 「心通り」にことばを学ぶことができる。一方、大人は本来幼児・子どもの持つ自由な心を、そのまま「心通り」にでなく、自分たちの「思い通り」に強制するから、ことばの学習・教育に失敗する。つまり、本来言語の習得のための最適の環境にいながら、心の自由が許されない強制力の強い、威圧的な環境 (世間、あるいは教室現場)、あるいはことば自身に何らかの権威を持たせ、それによって自分たちが思い通りに幼児・子どもを服従させるような環境の中では、ことばは仕込まれないし、育たない。
- C. 社会に中でこそことばが育つ。大人が思いどおりに設定した知識別に選別されたクラ

スでは、ことばは育たない。自分たちの良かれと思うばかりの「思い通り」の言語学
にことばを無理やり合わせるために、ことばの仕込みにおいて最も大切な、意味、心、
社会を除去するような言語観の元では、ことばの仕込みは負の学習となる。

このように、ことばが仕込まれる際に下手に人間の手を加えることが、自然の営み、自然の摂理を根本から阻害してしまう。自分たちの「思い通り」の心で自然の摂理を破壊してはいけない。スケートの小平選手のように、人から与えられるようなマネ事の「知識 (knowledge)」ではなく、自分の自由な心をもとに、「知恵 (wisdom)」を自らに仕込んだのである。ニホン英語は決して言語学者や国が忖度して作ったり選んだものではない。

ニホン英語は、この国の人々が100年という時間をかけてじっくりと醸造してきた、知識でなく知恵から生んだ「心通り」の、世界に開かれた日本人が世界の仲間の中で、国際舞台で使う第二の日本語である。筆者はこれを「開かれた日本語 (*Open Japanese*)」と呼ぶ (末延 2011)。フランスの児童心理学者ピアジェは“子どもに教えるはならない”と再三主張してきたが (末延 2018)、実に重いことばである。つまり日本人にとって自然なニホン英語は、教えるまでもなく、自ら進んで学ぼうとするものである。

こうして振り返れば、日本の英語教育は内臓が傷ついた学習者たちの頭脳を、ネイティブの発音や文法のぎっしり詰った人工頭脳にすげ替えるような愚行を続けてきたのではなかったか。

5. 結語

本稿は筆者が平時の授業や講演で主張した筆者の言語 (教育) 観・英語観について、生徒・学生たちの反応を整理したものである。講演は筆者個人の主張であるから、学習者たちがどのように反応するかは自由だが、振り返れば、筆者の主張は我田引水かも知れないが、日本の英語教育者のほとんどが「ニホン英語」をネイティブ英語学習のためには「百害あって一利なし」、と判断してきた中で、講演を聴いた多くの生徒・学生たちから、ニホン英語に対する賛同を得ることができた。

まずアンケートから得られた結語として、

(1) 英語学習において多くの生徒・学生たちが何らかの劣等感を持っており、“発音の仕方や文法のこと頭がいっぱい”など、今までの「知識の詰め込み」と先の見通しが読めない不安と葛藤している姿が見られた。ことばの自由へのあがきが聞こえてくる。逆に、はじめから英語学習に対する洋々たる前向きな目標の見えていた学習者は、本論文で紹介したほんの5～6の例外を除いて、見出すことはできなかった。これには教授者の言

語学、教育学の観点が少ないから影響しているのではないか。

(2) 目標言語である英語をさらに河にたとえるなら、然るべき観点は、一般的に原点という含みから、一見、ネイティブ英語らしく河上にあるかのような錯覚を持つが、実は河を上ることより下るうちに両岸に人々が住む人間の匂いがする河の本当の姿がわかるはずである。その河を下るうちに、河下にある「ニホン英語」(*Open Japanese*) をはじめ「中国英語」(*Open Chinese*)、「フランス英語」(*Open French*) などという言葉を使う人間のことばの温か味本来の使われ方が見えてくるし、その土地所どころの人間味あふれた、温かい方言ことばと世間の営みとのかかわりが、身に染みてくるのである。一方、どの河でも、逆に河上の方にばかり行っても、たどり着いた源流には、澄み切ってはよいが、ただ一滴の雫にしか出会えない。そのどちらを選ぶか。

(3) これらの高校生たちは英語学習の5～6年間に、必然的に少なくとも十数人の英語教師に出会っていることになる。講演で初めて世界には異種英語、国際英語があることを知っていた生徒・学生たちからすれば、その中にたった1人さえも国際英語、ニホン英語の理解者がいなかったということになる。事実、筆者に講演を依頼してきた先生方のほとんどは、英語プロパーではなく、申し合わせたようにスペイン語、ヒンズー語やスワヒリ語など第2外国語をプロパーとする人たちであった。さらにニホン英語を支持する人々の多くは、英語プロパー以外の専門を持ち、自分たちもニホン英語の使用者であることを認め、社会人として医学・科学の世界で活躍する人々からも賛同を受けてきたことが分かった。たとえばロンドンの夏目漱石記念館長の恒松教授が拙書『ニホン英語は世界で通じる』(平凡社新書)を読んで大学の講演に招へい下さり、「漱石さんがきっと一ばん読みたかった本でしょう。これを読んでいたらどれほど留学生活を楽しんでいたことか」と言って下さった。

(4) 新しい西欧の民主主義の精神を先頭に立って教えるべき英語教師が、ことばの多様性を教えることなく英米のネイティブ英語に執着し、英米の文化の中で育った英米英語の発音と一字一句、イディオムまでもそのまま真似させるといった観点をもって英語教育をこの100年間率いてきたことに、やりきれなさを感じる。先に引用した「ネイティブたちが自分の英語の微細をそのままに他の民族に押し付けるとすれば、それは傲慢だ。高1 KE」という感想文は80数年も前に日本の台湾統治時代の日本語教育政策で現地人の多くに見られた現象そのものであった(末延 2017)。

(5) 最近よく言われることだが、日本人が学校の英語教育に沿って表層的なネイティブ人の発音をわざわざ中途半端に上辺だけかっこよく見せかけてそっくり真似することで、却って通じないという現象が起こっていることに注目したい。さらにネイティブ英語の伝達率は、日本人の英語以下であることが証明されている(Smith 1979, 末延 2012)。これ

は音声学上、マネの横好きの結果にほかならない。現実のことばの世界では、互いが互いの個性ある方言を差別するような野蛮さを克服し、努力してコミュニケーション理解の合意点を設定し、仲良く実践しているのである。それはたとえばカナダでは早くから互いの言語・方言が法律で守られている。

(6) アンケート全体からいえることの一つは、学習者たちの誰一人として、自分の英語が使えない理由、原因を、文科省や教師たちに決して責任転嫁をしていなかったことである。むしろ悪いのは、教師の指導をきちんと守れなかった自分たち自身の怠慢の結果そのものだと反省している。なんと日本人らしいではないか。しかしこうした謙虚さ、人を責めない日本人特有の文化である謙虚さ、その良さとは裏腹に、だからこそ余計に、文科省や教師の責任逃れはいつまでたっても収まらない。最も自由で民主的な授業であるべき英語の授業で、立場上、自分の主張を表に「出せない」、他方では「出させない」ように育ててきたのである。

その何よりの証拠は、英語の学習が本来好きなのにできない、つまり頑張っても頑張っても成績が思うようについてこない、と苦悩する生徒が目立ったことである。このような傾向は、今の教授法の元では、皮肉なことに、それ相応の正当な帰結であって、教える側の視点の根本的な誤りからくる現象で、それ自体自明である。ほうれん草が好きなのに親の料理が未熟だから、食べるのを嫌がる欧米の子どもたちの姿と重なってくる。今後、この実証的研究の必要性を痛切に感じざるをえない。

さて、1980年の後半から始まり、以後30年にわたる筆者のニホン英語に関する講演は、少なくとも学習者には英語学習の今後の在り方について、今一度立ち止まって考えてもらうことができたと考える。筆者を講演に招いてくれた学校と教師、生徒たちのその後であるが、最初は困難が予想されたものの、講演後の報告書にはいずれも幸いながら、多くの生徒も教師も同じ観点から英語を見るようになり、積極的な英語への参加が見られるようになったと書かれていた。

最後に、「心ひとつ我が理」(末延 2018) という心の自由がことばを生むための知恵を育んだとする筆者の主張を、ここにまとめておきたい。身体の耳・目・口・鼻などの5つの感覚器官は人間にはこれを自力で作ることができない。つまり命と共に大自然からの借り物である。一方、人は三歳心のような素直な心が、知恵を編み出した。知恵と心は一心同体、シンクロナイズされて活動する。そしてその両者は借り物ではなく、まさに我ひとり誰にも譲れない個人のものである。くり返すが、その心は小さな心とはいえ、産んでくれた親や、大自然の摂理、何人からも、それに神でさえ本来干渉されるものではない。それが育ちながらすでに体内で心ひとつ我のもの、我がの理として知恵を育ませてきた。

このように人がすでに母親の胎内で生を受けた時点から、そしてそこから出て人間社会

という環境の中にいながら、ことばの発達においては個々人に備わっている守護としてのことばの元である「心ひとつ我が理」という理、そしてそれを一生涯にわたって表現する道具として、ことばが生まれ発達する。その「我が理」である自由な心が、人間のことばを生む原動力となっている、というのが筆者の主張するところであり、すでに著書『ことばの元を探る』(末延 2004 pp.75-84, 2017 pp.93-98) で問うた。

こうして大自然から授かった耳、口、目といった五感覚の助けを借り受けて、心、それも胎児であろうと幼児であろうと持って生まれた心が、なに人からも、何からも一切強要されることなく、たとえ両親からも大自然をつかさどる神々からも、一切の束縛から解き放されたとき、一切のものから自由となり、それが「心ひとつが我がの理」という理とかみ合わさった時、心は完全に自分のものとなる。そこではじめて人の心と身体は、大自然からの十全の守護を体内にいっぱい浴びるほどに受けて、ほぼ例外なくことばを獲得できる体勢に入り、その体制ができる。こうしてわが思い、心の自由が、気兼ねなく、心のおもむくままに自分自身のことばを生むのである。

こうして世界の人々と互いに包み隠さず気軽に交わるための共通のことばとして、古くから日本人の祖先たちだけでなく今も私たちが知恵を出し合って生み育ててきた英語こそが「ニホン英語」である。これは紛れもなく「知恵」を出し合った独自の産物であって、決してアメリカ英語の「知識」を真似たものではない。

心とそれを表現するためのことばは、母語であれ外国語であれ、本来、繰り返すが、個人個人の特有の所有物である。身体は自然からの借り物だが、心はすでに人間にとって身体の一部であり、心ひとつが我が理であり、生まれ落ちた時から個人にその使用の自由が任される。それは同時に個人が自己を守り、自己を表現するための最も優れた器の一つであり、アピールするための武器でもある。だから基本的には、母語も外国語も、そのことばの学習に当たっては、何びとたりともバイアスを以って介入することはできないし、してはならない。すべての基本は大自然の摂理によってなされる姿を限りない知恵と暖かい忠恕の心をもって見守ることである。

真実の美というのは、芸術家によると一見、醜い様相をしているという。が、実は人々が真理を求めて苦悩する中に見出されるという。日本人が心の底から一番安心して学べる英語というのは、日本の多くの人々が一世紀以上にわたって羨望し、追い求めてきた英米の一見華やかに見える「ネイティブ英語」ではなく、逆に、先人が世界に誇る日本文化の中でコツコツと築いてきながら、心ない人たちからは「醜い英語」といわれながらも、ソーシャルの言語観にしっかりと根付いた、私たちの手の届くところ、すぐ目の前にある「ニホン英語」であったのではないか。

(謝辞：本論文を完成するために感想文などご尽力くださった生徒・学生たちをはじめ社会人の方々に、また、講演の機会を与えて下さった先生方、事務局の方々に深く感謝したい。)

注1) 拙著「ニホン英語の類型化研究(8)」『人文論集』第52号も参照。本稿で使用した感想文の一部は、当然のことではあるが、多少重複していることをお断りしておく。さらに本稿では感想文のサンプルの多くは、できるだけ2000年以降のものを使用した。

注2) 逆に英語が嫌いなのに点数は高いという生徒もいる。これは受験戦争のためにと割り切って、点数稼ぎだけのために英語をがんばっている生徒も多い。教師の間違った観点にはうんざりしながらも、表面上は教師の体面を保持するために、うまく合わせる。大人である。しかし本当のことばの楽しさを知らないでいて、成績だけというのは悲しい。

参考文献

- Asher, J. J. The total physical response approach. In R. W. Blair (Ed.), *Innovative approaches to language teaching*. Rowley MA: Newbury House. 1982
- Chapelle, C. & Roberts, C. Ambiguity tolerance and field independence as predictors of proficiency in English as a second language. *Language Learning*, 36, 27-45 1986
- 本名信行編『アジアの英語』くろしお出版 1990
- Kinzler, K.D. et.al. Accent trumps race in children's social preferences, *Social Cognition*, 27, pp623-634. 2004
- Kraschen, S. *The Input Hypothesis: Issues and implications*. London: Longman 1985
- Labov, W. Recognizing Black English in the classroom. In J. Chambers, Jr. (Ed.) *Black English: Educational equity and the law*. Ann Arbor 1983
- Lippi-Green, R. Accent, standard language ideology and discriminatory pretext in the courts. *Language in Society*, 23, pp163-198. 1994
- 丸山圭三郎・佐藤純一『世界大百科事典』Hitachi Digital Heibonsha 1998
- ピアジェ J. 『模倣の心理学 (幼児心理学 1)』大伴茂訳黎明書房 1988, 原題: Jean Piaget, *La formation du Symbole chez L'Enfant* pp.83-85 (本書の元となったのは『児童の象徴形成』*La formation du symbole chez l'enfant*, 1945)
- 白井泰弘『外国語学習の科学』岩波書店 2008
- 白井泰弘『ことばの力学』岩波書店 2013
- シュルツ D., 村田孝次訳『現代心理学の歴史』培風館 1986
- ソシユール F. de, 『一般言語学講義』小林英夫訳 岩波書店 1980
- 『一般言語学講義—コンスタンタンのノート』影浦 峡, 田中久美子訳 東京大学出版会 2007.
- Smith, L. English for Cross-cultural Communication, *TESOL Quarterly* 13-3, 1979
- 末延岑生『ことばの元を探る—知恵と文字の仕込み』神戸商科大学研究叢書 LXXI, 神戸商科大学学術研究会 2004及びグローバル新書 天理大学おやさと研究所 2005.
- 『ニホン英語は世界で通じる』平凡社新書 平凡社 2010.
- Suenobu, M. *Errorology in English*. Yugetsu Shobo, 2002.11.
- *The Preparation Theory of the Origin of Language*, UH Monograph LXXVI, The Institute of Economic Research, University of Hyogo, Kobe, 2006.

- 末延岑生 「ニホン英語 (*Open Japanese*) をデザインする」(1)『芸術工学2011』神戸芸術工科大学 2011. 及び <http://kiyou.kobe-du.ac.jp/09/thesis/07-01.html> で検索。
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究(2) (形態編) —アジア英語 (*Open Asian*) を礎として」『芸術工学2012』神戸芸術工科大学 2012. また <http://kiyou.kobe-du.ac.jp/09/thesis/07-01.html> で検索。
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究(3)—統語編 (語順)」『人文論集』第48巻 兵庫県立大学 2013a, 及び『日本語学論説資料』論説資料保存会第51号に転載。また <https://u-hyogo.repo.nii.ac.jp/> のページにて末延岑生 (すえのぶみねお) で検索。
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究(4)—統語編 (時制)」日本「アジア英語」学会 2013b.
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究(5)—音声編」『人文論集』第49巻 兵庫県立大学 2014, 及び『英語学論説資料』論説資料保存会 第48号「音韻論」の項に転載。また <https://u-hyogo.repo.nii.ac.jp/> のページにて末延岑生 (すえのぶみねお) で検索。
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究(6)—歴史編 (イギリス偏向の英語教育—第二次世界大戦前夜まで)」『人文論集』第50巻 兵庫県立大学 2015. 及び『英語学論説資料』論説資料保存会 第49号」に転載。また <https://u-hyogo.repo.nii.ac.jp/> のページにて末延岑生 (すえのぶみねお) で検索。
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究(7)—従米から屈米への日米外交」『人文論集』第51巻 兵庫県立大学 2016. 及び <https://u-hyogo.repo.nii.ac.jp/> のページにて末延岑生 (すえのぶみねお) で検索。
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究(8)—日本人の言語観・言語教育観 (台湾統治時代の日本語普及政策から)」『人文論集』第52巻 兵庫県立大学 2017. 及び <https://u-hyogo.repo.nii.ac.jp/> のページにて末延岑生 (すえのぶみねお) で検索。
- 「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究(9)—「宿命」の心理学から「心ひとつが我が理」の心理学」へ—『人文論集』第53巻 兵庫県立大学 2018 及び <https://u-hyogo.repo.nii.ac.jp/> のページにて末延岑生 (すえのぶみねお) で検索。
- 他「日本人の英語—その形態的・統語的特徴」『人文論集』31-1神戸商科大学学術研究会 1995.9. 及び『英語学論説資料』第30号, 論説資料保存会に転載。
- 田中克彦『言語学とは何か』岩波書店 2003

補足：講演要旨 まとめスライド (紙面制限により抜粋)

<p>講演</p> <p>ニホン英語は 世界で通じる</p> <p>大阪府立大平野高等学校 末延 孝生</p>	<p>世界の人々は、 どんな英語を話している？</p> <p>世界の 20 億人の固有の英語を話している</p> <p>イタリヤ英語 1 億人 中国語話者 0.5 億人 インドの英語話者 2 億人 アジアの英語話者 2 億人</p> <p>アジア英語 10 億人</p> <p>インド英語話者 2 億人 中国英語話者 0.5 億人 インド英語話者 2 億人 中国英語話者 0.5 億人</p> <p>世界の 16 億人が自己流の英語 4 億人足らずがネイティブ英語</p>	<p>カタカナ・ひらがなの発音</p> <p>仁→ニ 毛→モ 乃→ノ 也→ヤ 利→リ 久→ク 奈→ナ 己→コ 世→セ 阿→ア 伊→イ 宇→ウ</p> <p>空海とカナ (1)</p>	 <p>空海とカナ (2)</p>
<p>アメリカ英語 ネイティブ英語とは ネイティブ英語は なぜ聞き取りにくい？</p> <p>音声の同化 Is he→Is'e</p>	<p>音声の消失 buy it→bait</p> <p>200% 聞き取り難い？</p> <p>「止まりま。」 100% 聞き取り難い？</p> <p>「...マッ百円です」 「止まりますか」「止まりませんか」</p>	<p>子音語尾の消失 map → ma ' mat → ma ' Mac → ma ' ニホン英語の発音だと マッブ マツト マック</p>	<p>母音の消失 [difficult] → [dfɪclt] - [dfɪclt]</p> <p>子音母音の脱落 [because] → [k:z] → [k:]</p>
	<p>区切り方 This/ is/ a / book. →Thi sisa / bOok. 英米人の区切り方 In June, the rainy season begins. →In Ju ne, the/ ra iny/ sea son be/ gi... In June, the rainy season begins.</p>	<p>Parks are filled with people enjoying the warm season. -Par ks are / filled with/ peo ple en / joy ing the/ war m/ sea son... Parks are filled with people enjoying the warm season.</p>	<p>中世英語では King=キング 今では:→キン→ケ</p> <p>わたい音</p> <p>Cut it out →カッティタウ</p> <p>ラスチャー=last year. ゲタ get out, get away, get up... ミッシャン Miss Young. カッティタウ cut it out.</p>
<p>音声の消失 +わたい音+ 区切り方 →誤解へ</p>	<p>My father and I are at my mother's desk. My father and I are at my mother's / desk. →My father and I are at my mother's death. My father die, my mother death. に聞こえない？</p>	<p>日英語 発音の比較</p>  <p>日本語 (孤立語) 日本語の発音 (5 つの母音).</p>	<p>● 12 母音体系</p>  <p>英語 (印欧語族) 英語の母音 (12 の母音)</p>

互いの「間違い」は、お互い様

外国人の日本語エラー

①これきれいな花ですね。

②日本人はみんなやさしいです。

①きれいな花ですね。
②優しいです。

日本人が順に描く世界地図

付加疑問はやっぱり、

isn't it?

付加疑問の種類

付加疑問形は何千万種も?

, right?
, no?
, isn't it?

これも厄介! book が複数になると

This is a book.
→ **These are books.**

語順

古英語(印欧語)では S+O+V

I fish eat.

15世紀から S+V+O I eat fish.

語順は変わる

語順が反対の日英文例

カタカナ英語 3000 語

20万もあるカタカナ英語は英語学習の宝庫

World Englishes

世界の英語

世界の英語の輪

ニホン英語

ニホン英語もその仲間です。

ニホン英語の例文集

I born in Kobe and grew in Kobe.
My family is four. I come to KUC.
I'm now in mandolin club.
I could not high school life.

アメリカ英語よりニホン英語の方がずっと情報が届く

	英	日	米	中	韓	印	露
読	92	71	26	97	89	74	78
話	92	74	45	83	93	77	75
し	89	82	55	99	86	54	68
比	89	64	16	79	83	49	61
中	82	60	29	74	78	41	55
平均	86	70	36	78	87	54	

ニホン英語とアメリカ英語の理解率(%)

Japanese English → Open Japanese

私はニホン英語を Open Japanese と呼んでいます。

Japanese English → 「日本人英語」
→ 「ニホン英語」 →

オープンジャパニーズ

英米人が「誤文英語」と指摘した 1,413 文のうち 94.7% つまり 1,279 文が国際的に「理解できる英語」

ニホン英語好きですか 投票グラフ

ニホン英語の情報を求めていますか

一般に日本人の英語をどう思いますか?

この授業を受けて後

今後、どんな英語を身につけたいですか?

インドの学生が学びたい英語の種類

アメリカ英語 → 4.0%

イギリス英語 → 33.5%

教養あるインド人の英語 60.8%

その他 1.7%